

研究論文

青年期における恋愛と性行動に関する研究(3)

— 大学生の浮気経験と浮気行動 —

牧 野 幸 志

A Study of the Heterosexual Romantic Relationships and Sexual Behaviors in Adolescence (3)

— The Experience of the Unfaithful Love of University Students and their Unfaithful Love Behaviors —

Koshi MAKINO

【要 約】本研究は、青年期における恋愛と性行動に関する調査研究である。本研究では、まず、現代青年の浮気経験、性経験を明らかにする。その後、浮気経験者への調査により、浮気関係、浮気行動の内容を明らかにする。被験者は、大学生・短大生 400 名(男性 195 名, 女性 205 名, 平均年齢 19.09 歳)であった。そのうち、浮気経験者は 52 名(男性 22 名, 女性 30 名)であった。

調査の結果、現代青年において浮気経験率は全体の 13.0%, 恋愛経験者における浮気経験率は 17.4%であった。性差はみられなかった。また、性経験率は全体で 40.5%であった。浮気行動を分析したところ、浮気関係では性的な関係を持つものが多く、浮気相手は同年齢が多かった。浮気の主な理由は、男性では「性的欲求を満たすため」が多く、女性では「相手の魅力」が多かった。浮気回数は、男女ともに 1, 2 回が多く、浮気が終わった理由は、女性では「恋人への罪悪感」が最も多かった。

キーワード：青年期, 恋愛, 性行動, 浮気.

1. 問題

1.1. 青年期における恋愛関係と浮気の定義

青年期における男女にとって、恋愛は非常に重要な人間関係である(松井, 1993)。近年、恋愛に関する心理学研究も増えている。恋愛研究は大きく4つに分類される(松井, 1990)。それらは、「恋愛に対する態度や認知」、「異性選択と社会的交換」、「恋愛感情と意識」、および「恋愛の進行と崩壊」である。本研究は、主に「恋愛の進行と崩壊」の中の崩壊に関連する「浮気」に関する研究である。ある特定の異性と恋愛関係にあるにもかかわらず、他の異性に好意を持ったり、性的な関係をもったりすることがある。そして、このことが、恋人との葛藤や関係崩壊の原因となることがある。一般的に、「浮気」とは「配偶者・婚約者などがありながら、他の異性に気がひかれ、関係をもつこと」を意味するが、近年では恋人同士であっても「浮気」という用語が使われている。牧野(2011)は、浮気を「恋人、配偶者、婚約者など特定の異性がいるにもかかわらず、他の異性に恋愛感情をもつこと」と定義して研究を進めている。

牧野(2011)は、大学生を対象とし、恋愛関係において浮気と判断される行動基準を明らかにしている。牧野(2011)は、自分の恋人が他の異性とどのような行動を取った場合に、浮気と判断するかを分析した。その結果、90%以上の人が「浮気ではない」と判断した行動は、異性に挨拶をした、異性と立ち話をしていたなど、通常大学生が儀礼的にも異性友人と行う行動であった。他方、浮気であるかの判断が分かれた行動は、誕生日のプレゼントを贈っていた、用もないのに電話をしていた、相手の肩や髪に触れたなどであった。また、恋人以外の異性との“2人だけ”の行動に対しては、浮気と判断される可能性が示された。特に、「2人だけで旅行」という行動については浮気と判断される傾向が強かった。90%以上の人が「浮気である」と判断した行動は、キスをしていた(96.0%)、性的関係をもっていた(97.0%)であった。身体接触の中でも、恋人以外の異性とキスをする以上の行為は、浮気と判断されることが示された。男女別でも、その比率を比較したが顕著な性差はみられなかった。

また、恋愛に関する排他性の研究を行った増田(1994)においても、「2人だけで映画に行く」という行動から「大変好ましくない」という判断が高くなり、「お互いの家をひとりで訪ねる」、「肩や髪に触れる」、「手をつなぐ」、「抱き合う」、「キスをする」という段階が進むに連れて「大変好ましくない」という評価が高くなっていった。これらの結果は、「恋人以外の異性と2人だけで行動をすること」が浮気の1つの要素となること、さらに、「恋人以外の異性とキスをする」、「恋人以外の異性と性的関係をもつ」という行動基準、つまり、「恋人以外の異性とキス以上の関係を持つ」ことが完全に浮気と判断される基準となることを示している。したがって、浮気を「恋人、配偶者、婚約者など特定の異性と恋愛関係にある人が、他の異性とキス以上の関係をもつこと」と操作的に定義することが可能であろう。

1.2. 親密な人間関係の崩壊と現代青年の浮気行動

これまで、社会心理学の分野において、恋愛関係における「浮気」に関する研究はほとんど行われていない。しかし、浮気に関する研究に示唆を与えるのが、夫婦における不倫や離婚に関する研究である(例えば、Atkins, Baucom, & Jacobson, 2001; Greeley, 1994)。不倫とは、

「結婚している人が配偶者以外の人と性的関係をもつ」ことである。Atkins, *et al*(2001)は、米国人の不倫について1991年～1996年の総合社会調査(GSS)のデータを用いて調べた。これによると、既婚者の13.2%が不倫をしたことがあった。また、米国では既婚男性の20%程度、既婚女性の10%程度に不倫経験がある(Greeley, 1994; Wiederman, 1997)。米国の既婚者の不倫経験と日本の現代青年の浮気経験を単純に比較することはできないが、1つの参考となるだろう。また、離婚については、司法統計(裁判所, 2004)によると、離婚の動機として、夫より妻からの申し立ての割合が高いものの1つとして「異性関係」があげられている。他方、夫からの離婚の動機としては低かった。つまり、夫の浮気や不倫を離婚の動機として申し立てる女性が多いことがわかる。

現代青年の恋愛関係の崩壊に関する研究においても、浮気が関係崩壊の原因となることわかってきている(牧野・井原, 2004)。牧野・井原(2004)によると、現代青年が別れを切り出した理由は、「価値観の不一致」が最も多かったが、男性において「自分の浮気」(約10%)、「相手の浮気」(約15%)という理由もみられた。また、別れを切り出された理由でも、最も多い理由は「価値観の不一致」であった。しかしながら、女性において「相手の浮気」(約10%)という理由がみられた。つまり、相手の男性が浮気をして、別れを切り出してきたという例である。このように、浮気は恋愛関係の崩壊の最も大きな原因とはいえないが、関係崩壊につながる重要な要因である。それにもかかわらず、日本において、現代青年のどのくらいの人が浮気経験をもっているのか、また、浮気経験者が実際にどのような浮気行動を取っているのかは明らかとなっていない。

1.3. 先行研究の問題点と本研究の目的

本研究では、まず、日本における現代青年の浮気経験の現状を明らかにしていく。浮気の現状を正確に調査するために、浮気を操作的に定義する。牧野(2011)や増田(1994)を参考にして、浮気を「恋人、配偶者、婚約者など特定の異性と恋愛関係にある人が、他の異性とキス以上の関係をもつこと」と定義する。牧野(2011)においては、「キス以上の関係」を「キスをする」、「性的な関係を持つ」という2項目に設定していたが、和田(2005)によると、一般的に、性行動は、キスをする、ペッティングをする、性的関係へと進展していく。したがって、本研究では「ペッティングをする」を新たに加える。また、牧野(2011)によると、浮気経験と性行動が深く関連する可能性が示されているため、性行動についても調査を行う。

以上のような先行研究に改善を加え、本研究は、日本の現代青年における浮気経験とその浮気行動について調べることを目的とする。まず、日本において、どの程度の青年が浮気をしたことがあるかという浮気経験を把握し、その後、浮気経験者に対してその浮気関係、浮気行動について調査を行う。この研究により、浮気の開始時期、浮気の原因、浮気へどちらが誘ったか、浮気終了の主導権などの浮気行動が明らかになれば、浮気防止への対策に役立つと考えられる。

2. 方法

2.1. 被調査者と実施方法

被調査者 被調査者は大阪府内の大学生・短大生 400名(男性 195名, 女性 205名, 年齢幅 18~25歳, 平均年齢 19.08歳, 全体の約70%が1年生)。ただし, 欠損値があるため分析により人数が異なる。「青年期における恋愛に関する研究」として無記名で実施した。調査は授業の一部を用いて行い, できるかぎり隣座席を空けるよう指示し, プライバシーに配慮した。

2.2. 調査用紙の構成

被調査者全員に, 性別, 学年, 年齢, 国籍への回答を求めた。本研究では, 留学生は分析の対象外とした。

性経験の有無 これまでに異性と性経験があるかを質問した。「ある, ない」から1つを選択させた。

浮気経験の有無 これまでに浮気(特定の異性と恋愛関係にあるにもかかわらず, 他の異性とキス以上の関係(キス, ペットィング, 性的関係)を持つ)をしたことがあるかを質問した。ただし, その関係は高校生以降のものに限定した。「ある」, 「ない」, 「これまで異性とつきあったことはない(これまで恋愛経験なし)」の中から1つ選択させた。以降, 浮気経験のある人のみ回答を求めた。

浮気経験 浮気人数 これまで浮気した人数の回答を求めた。 **同時浮気人数** これまで同時に何人の異性と浮気をしたことがあるか, 人数の回答を求めた。 **浮気回数** これまで浮気した回数の回答(1行為を1回と数える)を求めた。 **最多浮気回数** ある1人の恋人と恋愛中に最多で何回浮気をしたことがあるかの回答を求めた。

浮気行動 浮気を経験したことのある人に, 浮気相手を思い出してもらおうよう指示した(複数ある人は「最も好意を持っていた人」を想起させた)。**浮気関係** 浮気相手との関係性を「キス, ペットィング, 性的関係」から1つ選択させた。 **相手年齢** 被調査者と比較して年齢の関係を, 「年上, 同じ, 年下」から1つ選択させた。 **浮気開始時期** 浮気が始まったときの恋人との交際期間を月数で回答させた。 **浮気誘惑** どちらから浮気に誘ったかを「自分, 相手, どちらからともなく, その他」の中から選択, 回答させた。 **会う回数** 浮気期間中, 恋人, 浮気相手のどちらにより会っていたかを「恋人, 浮気相手, 同じくらい」の中から1つ選択させた。 **浮気理由** 浮気をした最も大きな理由を「浮気相手が魅力的, 恋人への愛情が冷めた, 出来心, 性的欲求を満たすため, 相手から強引に誘われて, 恋人が不誠実な行動を取った, 不明, その他」の中から1つ選択か記入させた。 **浮気回数** 浮気行為の回数を回答させた。 **浮気終了主導** どちらが浮気関係を終わらせたかを「自分, 相手, 両方から, 自然消滅, 現在も続いている」の中から1つ選択させた。 **浮気終了理由** 浮気関係が終わった理由を「浮気相手に飽きた, 浮気相手への気持ち冷めた, 恋人のほうがよかった, 性欲が満たされた, 恋人に対する罪悪感, 浮気が発覚, 不明, その他」の中から1つ選択か記入させた。 **浮気判明** 浮気が恋人に判明していたと思うかを「全くばれていない, ばれていないと思う, うすうす気づかれていると思う, ばれた」の中から1つ回答させた。 **浮気後悔** 浮気した(している)

ことを後悔しているかを「全く後悔していない」から「非常に後悔している」までの4段階(1～4点)で回答させた。得点が高いほど後悔している気持ちが強いことを示す。

3. 結果

3.1. 現代青年の浮気経験率と性経験率

被調査者の内訳 被調査者の平均年齢は19.08歳であった。被調査者400名のうち、275名(68.8%)は1年生であった(Table 1 参照)。3, 4年生の比率が非常に少なかった。したがって、本研究は、非常に若い現代青年を対象とした調査である。男女比率はほぼ50%ずつであった。

浮気経験率 浮気をしたことのある大学生は、400名中52名(男性22名, 女性30名)であった。全体の13.0%であった。ただし、これまで異性につきあったことがないという学生が102名(25.5%)含まれていた。そこで、これまで異性につきあったことのある学生のみを対象とした場合、浮気経験率は、17.4%であった(Table 2, Figure 1, Figure 2 参照)。男女別にみると、全体では浮気経験のある男性は11.3%, 女性は14.6%であった。恋愛経験のある男女では、浮気経験のある男性は、16.3%, 女性は18.4%であった。

性経験率 性経験のある大学生は、400名中162名(男性67名, 女性95名)であり、全体の40.5%であった(Table 3 参照)。男女別にみると、男性で34.4%, 女性で46.3%であった。ただし、これまで異性につきあったことがないという学生が102名(25.5%)含まれていた。また、恋愛経験はないが性経験があるという学生が1.3%(5名)みられた。したがって、これまで異性につきあったことのある学生のみを対象とした恋愛経験者の性経験率は、52.7%(157名/298名)であった。

浮気経験と性経験との関係 浮気経験のある学生のうち98.1%(51名/52名)が性経験のある学生であった。性経験はなく浮気経験のある学生は女性1名であった。他方、浮気経験のない学生のうち、性経験のある学生は43.1%, 性経験のない学生は56.9%であった。

Table 1 被調査者の内訳

学年	被調査者の性別		合計
	男性	女性	
1年生	147	128	275
2年生	18	40	58
3年生	18	30	48
4年生	12	7	19
合計	195	205	400

表内の数値は、人数を表す。

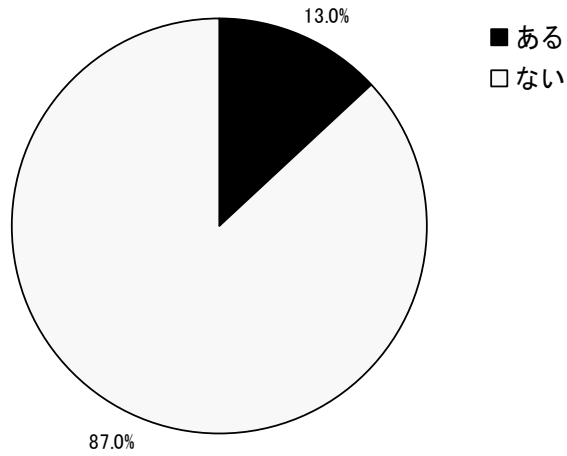


Figure 1 現代青年の浮気経験率(全体)

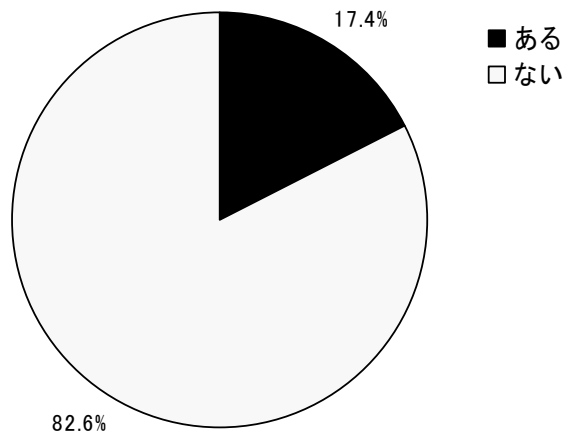


Figure 2 現代青年の浮気経験率(恋愛経験者のみ)

Table 2 被調査者の浮気経験と恋愛経験

浮気／恋愛経験	被調査者の性別		合計
	男性	女性	
浮気経験あり	22	30	52
浮気経験なし	113	133	246
恋愛経験なし	60	42	102
合計	195	205	400

表内の数値は、人数を表す。

Table 3 浮気経験と性経験との関係

浮気経験	性別				合計
	男性		女性		
	性体験あり	性体験なし	性体験あり	性体験なし	
浮気経験あり	22	0	29	1	52
浮気経験なし	43	70	63	70	246
恋愛経験なし	2	58	3	39	102
合計	67	128	95	110	400

表内の数値は、人数を表す。

3.2. 現代青年の浮気経験

これまでに1度でも浮気をした経験のある52名の大学生の回答に対して男女間で分析を行った。

浮気人数 これまで浮気をした異性の相手人数を男女間で比較した。t 検定の結果、有意差がみられた($t(50)=2.48, p<.05$)。男性($M=3.05$)のほうが女性($M=1.77$)よりも浮気をした相手人数が多かった(Figure 3 参照)。

同時浮気人数 これまで同時に浮気をした異性人数を男女間で比較した。t 検定の結果、有意傾向がみられた($t(50)=1.86, p<.10$)。男性($M=1.86$)のほうが女性($M=1.43$)よりも同時に浮気をした相手人数が多かった(Figure 4 参照)。

浮気回数 これまでの浮気回数について男女間で比較した。t 検定の結果、有意差はみられなかった($t(50)=1.25, n.s.$)。男性で3.73回、女性で2.53回であった。

同恋人最多回数 同じ恋人と交際中に行った最多浮気数を男女間で比較した。t 検定の結果、有意差はみられなかった($t(50)=0.84, n.s.$)。男性で2.27回、女性で1.87回であった。

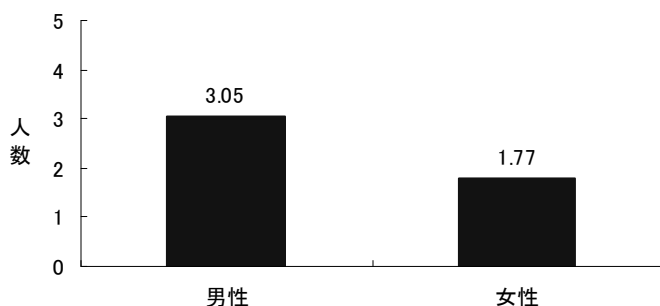


Figure 3 浮気人数

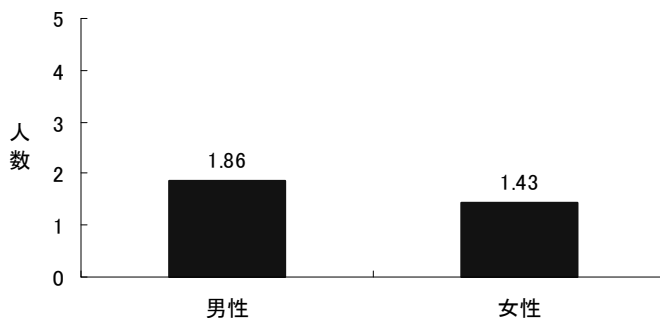


Figure 4 同時浮気人数

3.3. 現代青年の浮気行動

浮気関係 浮気相手との関係性の程度を調べた(Figure 5 参照)。その結果、約 70%が性的関係をもつ浮気であった。男女別に見ると、男性は 81.8%(18名/22名)、女性は 56.7%(17名/30名)が浮気相手と性的関係を持っていた。

相手年齢 浮気の相手との年齢差は、男女ともに同じ年齢が最も多かった(53.4%)。女性では男性と比べ、年上との浮気が多少多くみられた(Figure 6 参照)。

浮気開始時期 浮気が始まった時期はばらつきがみられた(Figure 7 参照)。つきあい始めてから、3ヶ月(約 20%)が最も多く、ついで、1ヶ月(約 18%)、6ヶ月(約 12%)であった。

浮気誘惑 浮気にどちらから誘ったかは男女でばらつきがみられた(Figure 8 参照)。男性では「相手(女性)から」(40.9%)と「どちらからともなく」(36.4%)が多く、女性では「相手(男性)から」(60.0%)が非常に多かった。

会う回数 浮気期間中にどちらによく会っていたかについては、男女ともに約 50%の人は浮気相手より恋人に会っていた(Figure 9 参照)。

浮気理由 自分が浮気をした最も大きな理由にはばらつきがみられた(Figure 10 参照)。男女別の特徴がみられた。男性は「性的欲求を満たすため」という人(40.9%)が非常に多く、女性は「相手が魅力的だった」という人(26.6%)、「出来心」という人(23.3%)、「相手から強引に誘われて」という人(16.7%)が多かった。

浮気回数 浮気相手との関係の回数は、男性では 2 回、女性では 1 回が多かった(Figure 11 参照)。

浮気終了主導 どちらか浮気関係を終わらせたかを分析した(Figure 12 参照)。その結果、全体では自分が浮気を終わらせた人が多かった(36.5%)。しかし、男女で差がみられた。男性では自分が終わらせたという人(50.0%)が最も多く、女性では自然消滅の人(36.7%)が最も多かった。

浮気終了理由 浮気関係が終わった最も大きな理由を分析した(Figure 13 参照)。その結果、浮気関係が終わった理由は男性ではばらつきがみられたが、女性では「恋人に対する罪悪感」が最も多かった(36.7%)。現在も続いているという人が全体では、11.5%いた。

浮気判明 浮気をしたこと(している)ことが恋人に判明していたと思うかという自己認識を分析した(Figure 14 参照)。その結果、63.5%の人が恋人には「全くばれていない」、「ばれていないと思う」と認識していた。特に女性では、53.3%の人が「全くばれていない」と認識していた。

浮気後悔 浮気をしたこと(していること)に対する後悔得点の平均値を男女間で比較した。t 検定の結果、有意差はみられなかった($t(50)=1.39, n.s.$)。男性で 2.27、女性で 2.67 であった。

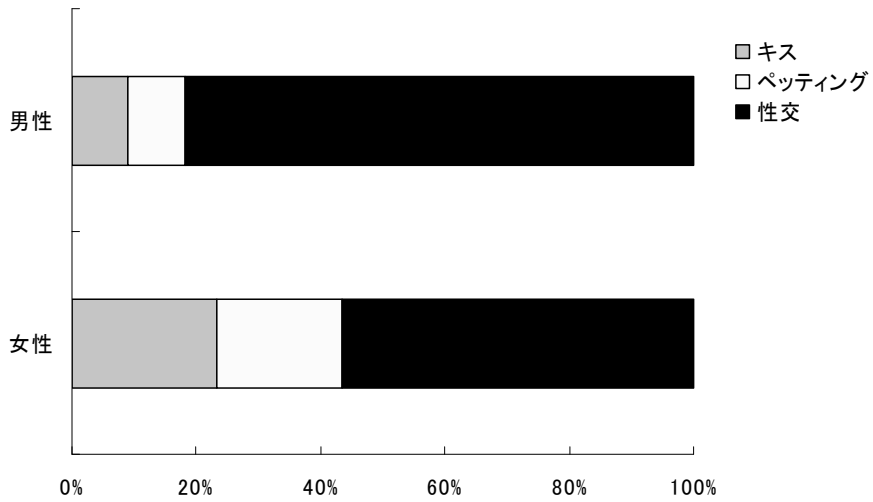


Figure 5 浮気関係

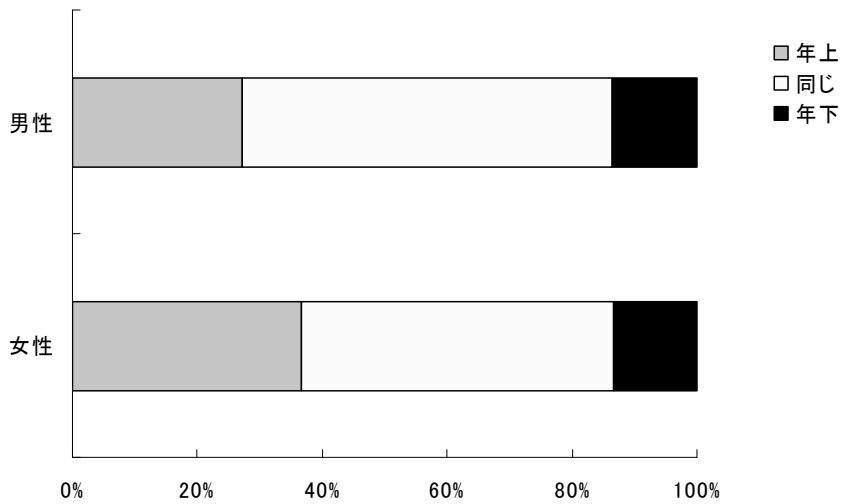


Figure 6 浮気相手との年齢関係

青年期における恋愛と性行動に関する研究(3)

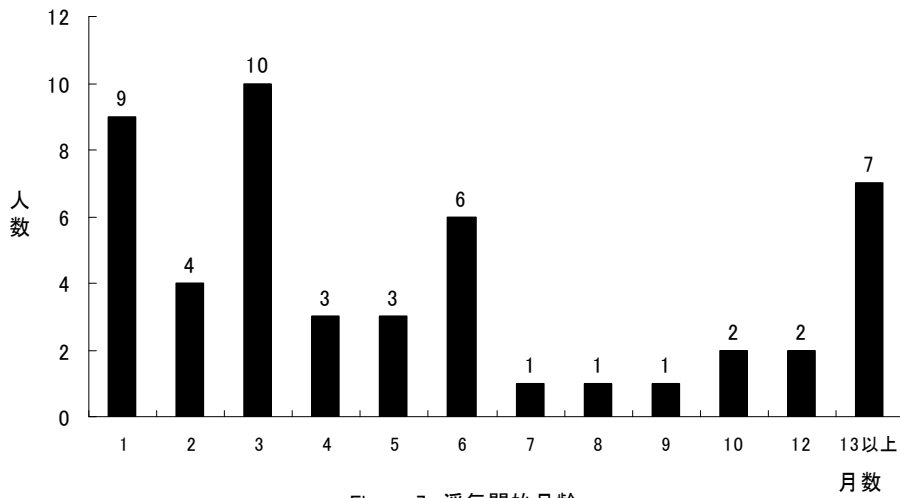


Figure 7 浮気開始月数

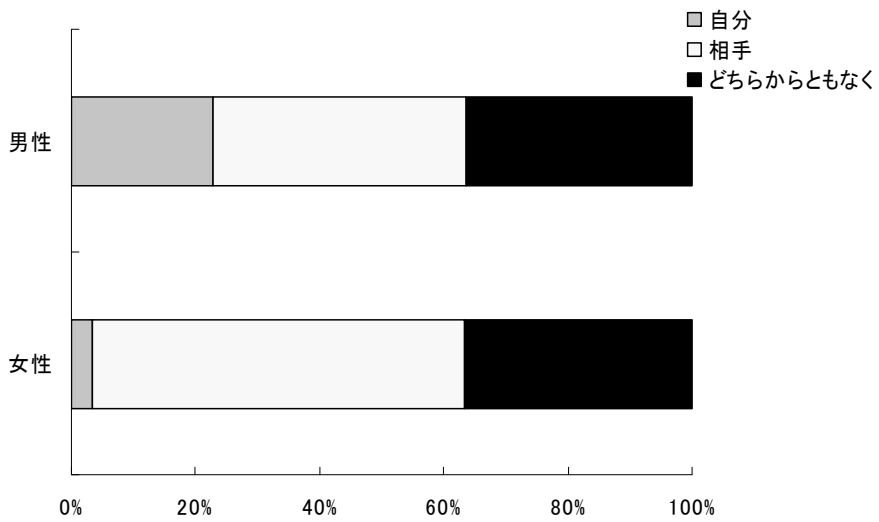


Figure 8 浮気への誘惑

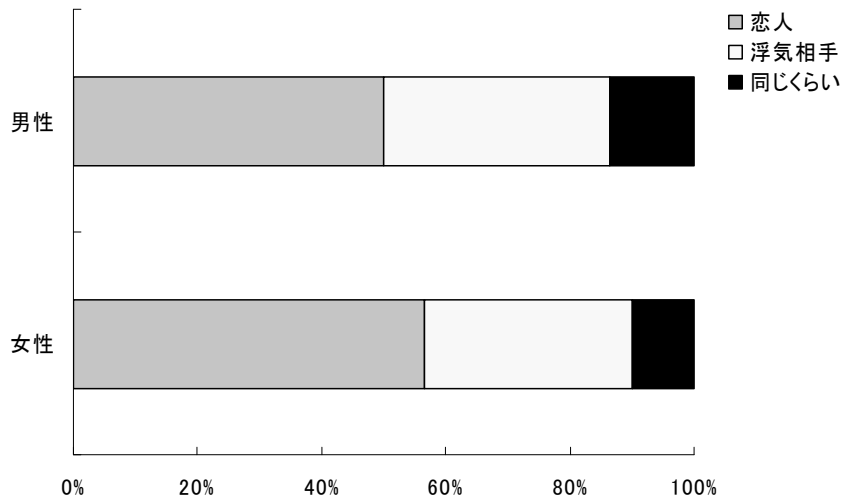


Figure 9 浮気中の会う回数

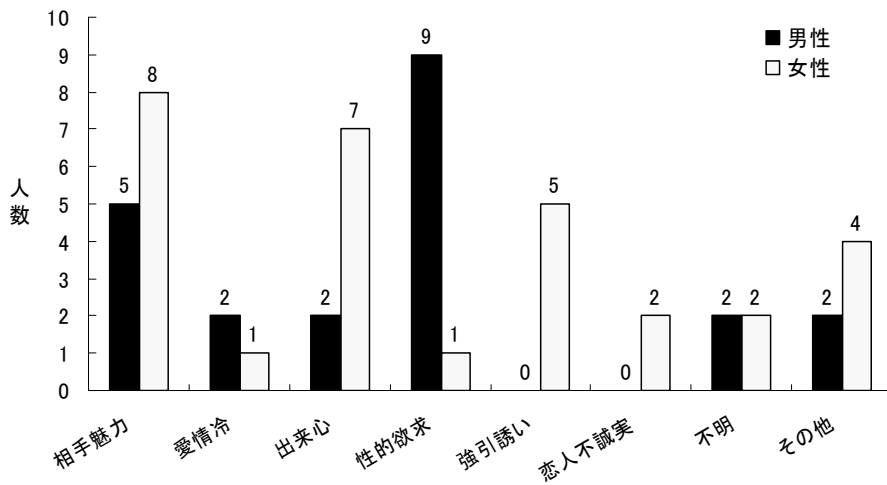


Figure 10 浮気の原因

青年期における恋愛と性行動に関する研究(3)

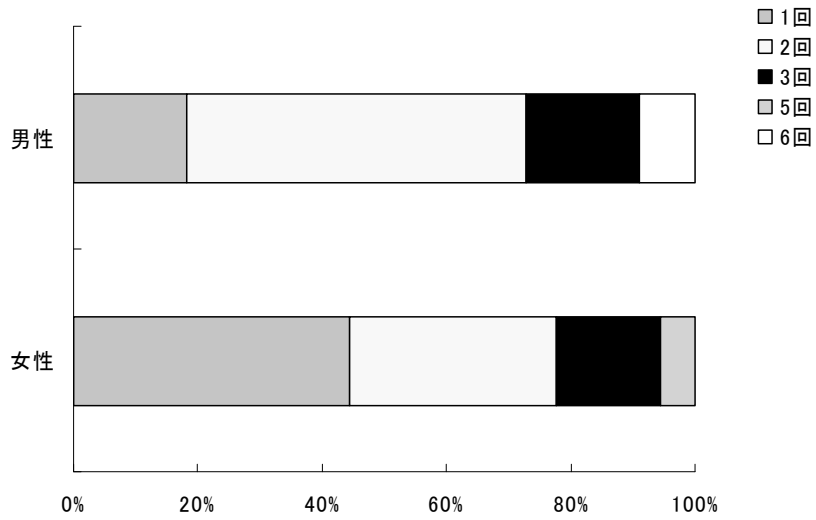


Figure 11 浮気相手との浮気回数

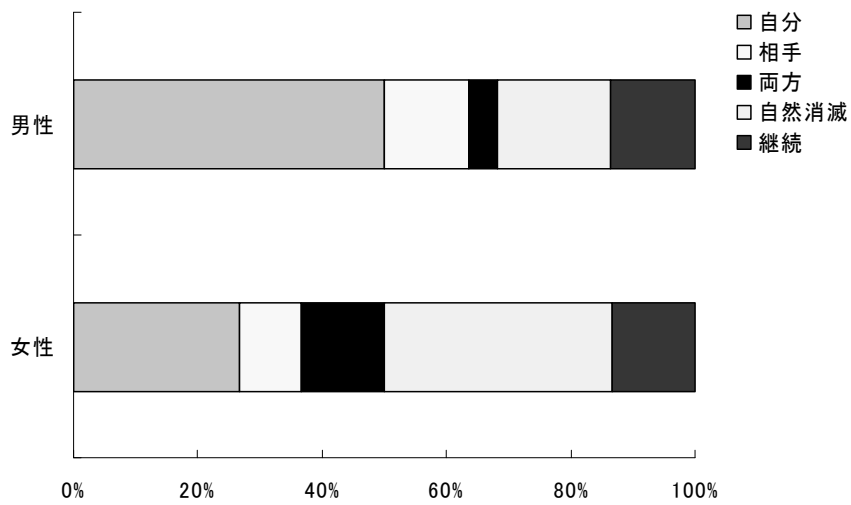


Figure 12 浮気終了の主導権

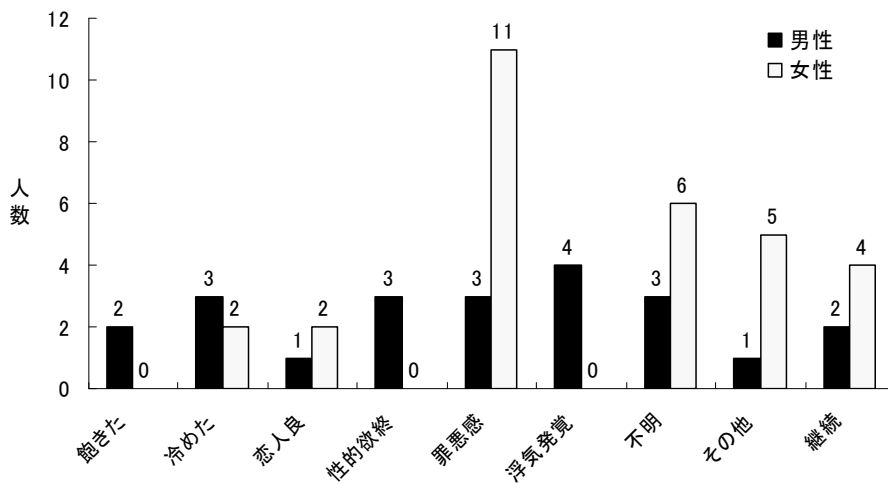


Figure 13 浮気終了の理由

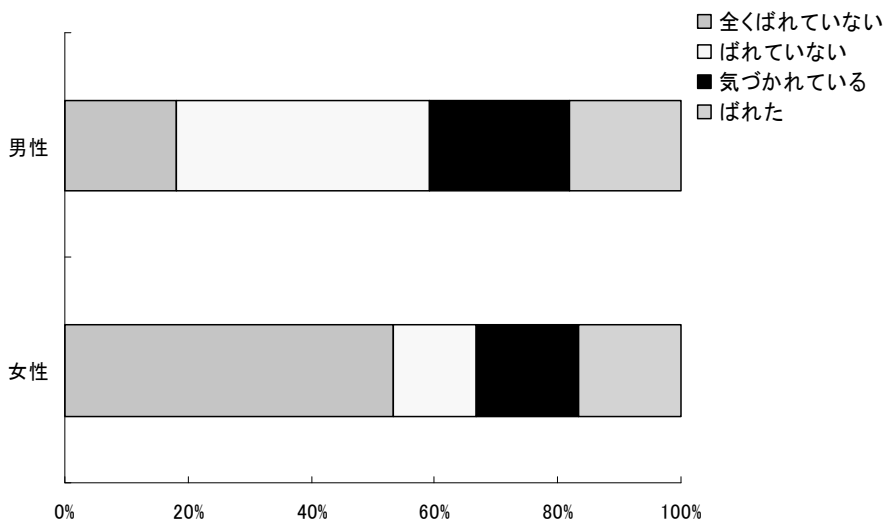


Figure 14 浮気の判明(本人の認知)

4. 考察

本研究の目的は、日本の現代青年における浮気経験率と浮気経験者の浮気関係、浮気行動について調べることであった。具体的には、まず、日本において、現代青年のどのくらいの割合の若者が浮気をしたことがあるかという浮気経験率について調べた。次に、浮気経験者に対して、その浮気関係と浮気行動を明らかにした。

4.1. 現代青年の浮気経験率と性経験率

400名の大学生のうち、浮気をしたことのある人は、全体の13.0%(52名)であった。ただし、この中にはこれまで異性とつきあったことがないという学生が102名含まれていた。そこで、これまで異性とつきあったことのある学生のみを対象とした場合、浮気経験率は、17.4%であった。また、浮気経験率に性差はみられなかった。浮気経験率は全体で約10%、恋愛経験者においては約20%であった。ただし、本研究の被調査者の約70%は大学1年生であり、比較的若い人に限られていたため、実際の浮気経験率はもう少し高いのかもしれない。

また、被調査者のうち性経験のある人は、全体40.5%であった。男女別にみると、男性で34.4%、女性で46.3%であった。大学1年生から4年生までの性経験率を調べた日本性教育協会(2001)によると、1999年の大学生の性経験率は、男性62.5%、女性50.5%であった。この結果と本研究の結果を比較すると、男性の性経験率はかなり低かった。本研究の被調査者の約70%が1年生であったことから考えると、男性は2年生以降に性経験が増えると予想される。他方、女性は大学1年生までに性経験があることが予想される。また、これまで異性とつきあったことのある学生のみを対象とした場合、恋愛経験者の性経験率は、52.7%であった。

さらに、浮気経験率と性経験率との関連を調べた。その結果、浮気経験のある学生のうち98.1%(1名を除く51名)が性経験のある学生であった。つまり、浮気経験のある人は1名を除いて、全員が性経験のある人であった。牧野(2011)によると、恋愛経験よりも性経験のほうが浮気意志との関連が強かった。今回の結果も、浮気行動が性行動と深く関連することを示す結果であろう。

4.2. 現代青年の浮気経験

400名の被調査者のうち、これまでに1度でも浮気をした経験のある52名の大学生の浮気経験について分析を行った。まず、これまでの浮気相手の人数に性差がみられた。男性のほうが女性よりも浮気をした相手人数が多かった。男性で約3人、女性で約2人であった。また、同時に浮気をした異性人数も男性のほうが女性よりも多い傾向がみられた。男性で約2名であった。この結果から、女性よりも男性のほうが浮気をする相手人数が多い、同時に浮気する人数が多いことがわかる。しかしながら、浮気行為の回数、交際中に行った最多浮気回数について性差はみられなかった。本研究では、浮気行為の回数について性差はみられないが、男性は女性よりも浮気の相手人数が多く、同時に複数の浮気相手を持つ可能性が示された。

4.3. 現代青年の浮気行動

浮気経験のある52名の大学生の浮気行動を分析した。まず、浮気相手との関係性の程度を調べた。その結果、約70%が性的関係をもつ浮気であった。特に、男性では81.8%(18名/22名)の学生が浮気相手と性的な関係をもっていた。女性は56.7%(17名/30名)が浮気相手と性的関係を持っていた。このことは、男性の性的欲求の高さ、性的寛容性の高さを反映しているであろう。また、男性の浮気の目的の1つが性的行為であることも示唆しているであろう。次に、本人と浮気相手との年齢関係は、男女ともに同じ年齢が最も多かった(53.4%)。これは、被調査者のほとんどが1年生ということもあり、同級生との浮気関係を持っていたと推測される。また、女性では男性と比べ、年上との浮気が多少多くみられた。

次に、恋人とつきあいはじめてから、どのくらいで浮気が始まったかを調べた。その結果、時期にはばらつきがみられたが、つきあい始めてから3ヶ月が最も多く、ついで、1ヶ月、6ヶ月であった。恋人とつきあい始めて、比較的早い時期に浮気が始まっていることがわかる。どちらが浮気に誘ったかは、男女でばらつきがみられた。男性では「相手(女性)から」と「どちらからともなく」が多く、女性では「相手(男性)から」が非常に多かった。ここでは男女の回答が一致していない。女性の回答によると、男性から浮気に誘ったというケースが多くみられるようである。浮気期間中に、恋人と浮気相手のどちらによく会っていたかについては、男女ともに約50%の人は浮気相手より恋人に会っていた。浮気をしながらも、恋人と多く接触している人が半数程度いた。

浮気をした最大の理由にはばらつきがみられた。男女で特徴がみられた。男性は「性的欲求を満たすため」という人が非常に多く、女性は「相手が魅力的だった」、「出来心」、「相手から強引に誘われて」という人が多かった。この結果は、男性の浮気経験者の約80%が浮気相手と性的な関係を持っていたことからわかるように、男性は「性的な欲求を満たす」目的で浮気を行っていることがわかる。他方、女性は、浮気の「相手の魅力」により浮気をする場合もみられるが、「出来心」や「相手から強引に誘われて」という消極的な理由もみられた。浮気相手との浮気の回数は、それほど多くなく、男性では2回程度、女性では1回程度であった。

浮気関係の終わりについて分析した。どちらか浮気関係を終わらせたかを調べた。その結果、全体では自分が浮気を終わらせた人が多かった。松井(1993)によると、別れの主導権において、別れを切り出した人は「相手」より「自分」が多いという。これは、「自分の人生は自分で決めたい」という認知的バイアスの現れであるという。しかし、本研究では男女で差がみられた。男性では自分が終わらせたという人が最も多く、女性では自然消滅の人が最も多かった。次に、浮気関係が終わった最も大きな理由を調査した。その結果、男性では浮気関係が終わった理由にはばらつきがみられたが、女性では「恋人に対する罪悪感」が最も多かった。女性のほうが、浮気をした際に、恋人に対する罪悪感を持っている人が多かった。浮気をしたこと(している)ことが恋人に判明していたと思うかという自己認識を分析した。その結果、63.5%の人が恋人には「全くばれていない」、あるいは「ばれていないと思う」と認識していた。特に女性では、53.3%の人が「全くばれていない」と認識していた。女性のほうが浮気をして、恋人にばれていないようである。最後に、浮気をしたこと(していること)に対して後悔しているかを男女間で比較した。その結果、性差はみられなかった。

4.4. 本研究の問題点と今後の課題

本研究の問題点と今後の課題について述べる。本研究の問題点は、被調査者が比較的若い青年期前期に限られていることである。牧野(2011)においても、大学生を調査対象としたが、1年生が約60%、1,2年生の割合は80%を越えていた。本研究では400名の被調査者を対象としたが、1年生の割合が約70%であった。年齢の上昇とともに、恋愛経験率、性体験率も高まることから考えると、より高い年齢の青年期の被調査者が必要であろう。被調査者が比較的若い青年に限られていたために、浮気経験率が低かったのかもしれない。大学生においては、3,4年生の被調査者の追加、可能であれば20代の社会人のデータの追加が必要であろう。そうすることで、浮気行動の詳細がより明らかになるであろう。最後に、今後の課題を述べる。まず、現代青年の被浮気経験を調べる必要がある。本研究では、「自分が浮気をしたことがある」浮気経験者を対象として浮気行動を調査した。しかしながら、青年の中には「浮気をされた人」もいるだろう。浮気をされた被浮気経験を対象として、恋人の浮気行動を分析していく必要があるだろう。次に、浮気行動の規定因を明らかにする必要がある。本研究において、割合としては高くはないが、全体の約10%、恋愛経験者の約20%が浮気経験者であった。青年期において、どのような要因が浮気行動を促進あるいは抑制するのかを、恋愛に対する態度、性に対する態度、浮気に対する態度、性格特性などの要因から特定していくことが不可欠である。浮気行動の規定因が明らかとなれば、将来的には浮気行動の防止策についても貢献することができるであろう。

引用文献

- Atkins, D. C., Baucom, D. H., & Jacobson, N. S. (2001). Understanding infidelity: Correlates in a national random sample. *Journal of Family Psychology*, **15**, 735-749.
- Greeley, A. (1994). Marital infidelity. *Society*, **31**, 9-13.
- 牧野幸志 (2011). 青年期における恋愛と性行動に関する研究(2) —浮気の判断基準と浮気に対する態度— 経営情報研究, **19**, 41-56.
- 牧野幸志・井原諒子 (2004). 恋愛関係における別れに関する研究(1) —別れの主導権と別れの季節の探求— 高松大学紀要, **41**, 87-105.
- 増田匡裕 (1994). 恋愛関係における排他性の研究 実験社会心理学研究, **34**, 164-182.
- 松井 豊 (1990). 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, **33**, 355-370.
- 松井 豊 (1993). 恋ごろの科学 サイエンス社
- 日本性教育協会(編) (2001). 「若者の性」白書—第5回青少年の性行動全国調査報告 小学館
- 裁判所 (2004). 司法統計年報 平成15年度版(裁判所ホームページ司法統計年報による)(http://courtdomino2.courts.go.jp/tokei_y.nsf)
- 和田 実 (2005). セクシュアリティ 性に対する態度と性行動 和田 実(編著) 男と女の対人心理学 北大路書房 Pp.93-114.
- Wiederman, M. W. (1997). Extramarital sex: Prevalence and correlates in a national survey. *Journal of Sex Research*, **34**, 167-174.